

市民が見つめ、 市民を見つめる 名橋



「いくつもの時代と思い出を刻みながら、人々の暮らしを見つめてきた橋があります」——これは、『旭橋』という名の豆本（発行・旭橋を語る会／平成14年）の書き出しである。

旭橋に限らず橋は古今東西、出会いや別れや旅立ちの背景として、人間模様を映してきた。橋にはそれぞれ独特の個性があり、物語性があり、その地に育った住民の原風景として記憶されている。それがまたその町の魅力でもあった。

「あった」というには訳がある。橋は川を横断する、いわゆる道路である。よって橋は通行に便利のように改良され（つまり個性は失われ）、橋を渡っていることすら気がつかないことさえあるほどになった。旭橋と並ぶ名橋と言われた、1924（大正13）年竣工の札幌市の豊平橋も、その三連のアーチ橋は、なくなった今でも描くことができるけれども、現在の豊平橋を描くことはもちろん、その形態を思い出すことも困難である。橋はもう、国道何号という道路に、吸収されてしまったのである。

そんな現代において旭橋は、幸運にも生き長らえてきた。いや、単なる幸運ばかりではなく、人々の愛着と保存への熱意、その先進的工学技術によって73歳を迎えたのである。その間には、太平洋戦争時に鉄製の欄干の供出（昭和19年）や、経済性や利便性から、照明灯が全国一律の水銀灯に

なる（昭和41年）など、その原型を保つことが困難な歴史も乗り越えてきたのである（欄干は昭和32年に木製から再び鉄製に戻され、昭和58年には飾り塔やランタン型の照明灯が復元された）。

旭橋の歴史は1892（明治25）年、現在の橋の位置にわずか幅一間（約1.8m）の土橋（表面に土をかけた橋）が架けられたのに始まる。それまでは旭川村から石狩川の対岸、近文原野に行くには、渡し舟しか方法はなかった。その後、木橋の時代を経て、1904（明治37）年にアメリカから輸入された鋼鉄製による初代旭橋が架けられたが、師団方面への路面電車の通行を可能にするためもあり、1932（昭和7）年、橋長225.4m、幅員18.3mの現在の旭橋が竣工する。設計指導をしたのは、当時の北海道大学工学部長・吉町太郎一博士である。ちなみに彼の師は、北海道遺産である小樽の北防波堤を設計した広井勇である。

道北の中心都市旭川市の地図を見ると、大川河口の扇状地の、まったく逆の扇状地となっているのが分かる。本流石狩川、牛朱別川、忠別川、美瑛川が街の西部で合流し、漏斗で集められたように、景勝地神居古潭へと東へ流れるのである。このことは、川の街旭川が、橋の街でもあるということだ。その数760橋以上といわれ、明治の名橋心齋橋を始め、俗に八百八橋といわれる水の街